

## バーバ・ムクターナンダの物語

### スワーム・シッターナンダ

1972年、私はシカゴ近郊にある大学の実験的なプログラムで、インド哲学と神秘主義についてのクラスを教えていました。精神性への関心が高まり、精神的な進歩を遂げるためには、グルを見つけなければならないと決心したところでした。12人の学生を連れていくインドへの2カ月間の実地見学旅行を手配することができました。この旅行で、学生たちは神秘主義、瞑想、そしてインド文化についてより学びを深め、そして、私は精神の師を見つけることができるだろうというものでした。

私たちが旅立つ直前に、1970年にカリフォルニアでバーバと出会った友人が、私に助言しました、「スワーム・ムクターナンダに絶対に会うように！」と。私は彼の助言に従い、彼のアーシュラムを私たちの最初の目的地とする予定を立てました。私は知らなかったのですが、この友人はバーバに手紙を書き、アメリカ人の学生たちのグループがインド旅行でバーバに会いに行く計画をしていることを伝えていました。

1972年3月25日、私たちは公共バスで空港から、当時、シュリー・グルデーヴ・アーシュラムと呼ばれていた所(現在のグルデーヴ・シッター・ピートウ)に向かいました。バスは、仕事に向かう人たちでいっぱいでした。市場で売るための品物を籠いっぱいに入れて運んでいる人たちや、けたたましく鳴き声をあげる大きなヤギを連れている人たちもいました。

学生たちと私は、だらしなくみすぼらしく見える一団でした。私たち世代の若者が着る服 —— 破れたブルージーンズ、戦闘服、絞り染めのTシャツ —— を着て、バックパックにすべての物を詰め込んでいました。

アーシュラムの中央にある中庭のグル・チョークに入ると、私は驚くべき光景に出会いました。何十人ものアーシュラマイト(アーシュラムに住む人)が、汚れ一つないヨーギの衣装を身にまとい、静かに中庭に立っていました。そのうちの一人が私たちの方にやって来て出迎えてくれました。「バーバに会いたいですか」。私たちは「はい！」と熱狂的に答えました。

バーバは一段高いところに座っていました。そして私たちが近づくと、彼の注意が私たちの方に向くのが分かりました。私たちが紹介されている間、バーバは私たちを上から下まで見ていました。さらに、彼はもっとよく見ようとサングラスも外しました。そして大きな笑顔を浮かべて、言いました。「ああ、あなたたちはみんな良い家庭の出身だね」

バーバの言葉に私は嬉しくなりました。なぜか私には、バーバが私たちの家庭環境以上のことに言及していることが分かったからです。みすぼらしい格好をしてはいましたが、私たちは良い意図を持った良い人々でした。そして、バーバは私たちの心の内を見ることができたのでした。

バーバは私たちの小さなグループを、大いなる愛を持ってアーシュラムに迎えました。彼は上の庭にあるバンガローを私たちのために用意してくれました。そして通常使われる辛いスパイスを使わない特別の料理を用意してくれました。

到着した翌朝、私たちは掲示板にあるアーシュラムの日課に目を通しました。1日は午前3時30分に始まり、夜9時に終わり、そして、その間さまざまな必修の活動がありました。チャンティングの時間、瞑想、無私の奉仕の時間などです。バーバのアーシュラムは厳しい規律でインド

中に知れ渡っていました。探究者たちが自分自身の内なる自己を体験できるようにと、バーバ自身がこのような日課を立てたのでした。

学生たちは仰天しました。彼らはこのようなことはしたくないと、立ち去るために自分たちの荷物をまとめ始めました。私は板挟みになったと感じました。バーバと共にもっと時間を過ごしたい、しかし、私は彼らの教師であり、このグループに責任を持っています。もし彼らが出発するのなら、私も彼らと共に出発しなければならないと分かっていました。

ほとんど間髪を入れずに、私たちはバーバからメッセージを受け取りました。そのメッセージとは、「3日の間、私の招待客として滞在しなさい。あなたたちが参加しなければならないプログラムは、昼食のみです」というものでした。

学生たちは喜びました。このようなスケジュールなら彼らも大丈夫です。私は、個人的にはとても驚き、もう少しここにいてバーバと共に時間を過ごせることへの感謝の気持ちで満たされました。そして、私たちは荷を再び解き、落ち着くことにしたのです。

バーバはアーシュラマイトの一人に、私たちにアーシュラム内を案内するように頼みました。その後、別の人には私たちをガネーシュプリーの町に案内し、バガヴァーン・ニッチャーナンダの寺院に連れていくように頼みました。そして、私たちは毎日欠かさず昼食に行き、アンナプールナーではバーバは私たちのために特別の食事を準備してくれました。私たちはアーシュラムで3日間、満足して過ごしました。

インドへの旅が終わった後、学生の中にはシッダ・ヨーガの道の教えを実践し始める者もいました。私はグルの仕事に私の人生をささげるようになりました。

バーバとの最初の出会いを考えるたびに、私たちそれぞれが、どんな状況にあっても、彼の与えたいもの —— 彼の恩恵 —— を受け取ることができるようにしてくれたバーバの限りない慈愛の心を思い出します。それは非の打ちどころがない歓迎でした。



© 2018 SYDA Foundation®. 著作権所有。